

# ☆☆☆ Library Eye 2022 ☆☆☆

第29号 2022年8月1日(月)

発行元 明星中学校・高等学校 図書館



## 【明星幼稚園に、読み聞かせに行ってきた！】

「読み聞かせ隊」と名付けて、年に1~2回、高校生を対象に募集を行い、明星幼稚園に絵本や紙芝居の読み聞かせに出かけています。コロナ禍の2020年度からは実施を見送っていましたが、今年度は、定員6名とこれまでより人数を減らすなど、感染防止対策を行いながら実施しました。応募人数は12名で、子どもが好き！読み聞かせをしてみたい！将来、保育士や幼稚園の教諭を目指している！ボランティアを経験したい！など、希望の動機は様々でした。

抽選の結果、「読み聞かせ隊」に決まった生徒は、事前に、図書館で絵本や紙芝居を選びます。図書館には600冊以上の絵本があり、中には読み聞かせ用の大型本もあります。生徒は絵本を借りて、園児達に楽しんでもらえるように、読み聞かせの練習を個々に行ったようです。そして、いよいよ当日です。高校1年生3名と3年生3名の生徒を、司書が引率して、敷地内の幼稚園へと出発しました。園児は年中組の3クラスで、各クラス25名位です。床に座って待っていた園児達は、生徒が2名ずつそれぞれのクラスに入ると、興味津々という表情で迎えてくれました。今回読んだ絵本は、『おぼけの天ぷら』『オリビア』『ぐりとぐら』『ぴょーん』『ペネロペウみであそぶ』『ねずみくんのチョコッキ』です。読み聞かせが始まると、園児達はお話を耳を傾け、一生懸命に聞いていました。生徒は、園児達が見やすいよう絵本を園児の目線の高さに合わせたり、抑揚をつけたり、声のトーンを変えたり、質問をしてみたり…それぞれが工夫を凝らしていました。楽しそうな言葉のやり取りも聞こえてきて、あっという間に時間が過ぎ、園児達は、「もう終わりなの？」と残念そうでした。

参加した生徒に感想文を書いてもらうと、「行くまでは緊張して、上手く出来るか心配だったけれど、園児の笑顔や手を振ってくれる姿を見て、緊張が解けて楽しく読み聞かせが出来た。」といった声が多くありました。また、「貴重な経験だった。」「新たな発見や気づきがあった。」など、生徒達にとって大きな意味があったようです。今後も、定期的に「読み聞かせ隊」を実施して、生徒達に新しい経験を得る機会を提供できたらと思います。(司書)



## 【夏休みの宿題☆私のおすすめの1冊】

今年も中学生に、「私のおすすめの1冊」を紹介する宿題が出ています。今回は趣向を変えて、紹介カードを葉っぱの形にし、おすすめ理由をテーマで表現してもらいます。提出されたカードは、木の幹が描かれたシートに貼って、明星祭で展示する予定ですので、保護者の皆さんも楽しみにしてください。

コロナ禍の夏休みも3回目です。普段なかなか本を読む時間がない人も、1日5分でもよいので、落ち着いて、夏休みに何か1冊読んでみましょう。どんな本が良いか迷っている人は、クラスで配布した角川書店・岩波書店・集英社・新潮社の4社から発行された、「中高生へのおすすめ本」が掲載された小冊子(図書館入り口に掲載本を展示中)を参考にしてみてください。

今年は、夏期講習期間に朝自習・朝読書(7時開館)ができます！是非、利用してください。(司書)

## 【読書のチカラ、畏るべし！】

1860年、遣米使節団として訪米した77名の侍たちはブロードウェイでパレードを行い、沿道を埋めつくした50万人にも及ぶアメリカの市民たちから、熱狂的な歓迎を受けました。アメリカの人々は、チョンまげに羽織袴、大小の日本刀を腰に差した侍たちの、礼儀正しく、威風堂々とした様子にすっかり魅了されてしまったのです。その時、群衆の中にいた詩人のホイットマンも、その姿を詩集『草の葉』の中で称賛しています。幕末の日本人男性の身長は、約155cmだったそうですが、侍たちが日々練りあげてきた精神力がおのずから発揚していたのでしょう。

この遣米の際には、護衛として勝海舟、坂本龍馬、福沢諭吉といった志士たちが咸臨丸に乗りこんで同行していたのですが、江戸時代の教育の根幹と言えば、徹底的に「書を読む」ことにありました。

松下村塾を開いて、多くの志士たちを育てた吉田松陰は、わずか29年の生涯の間に5回も獄中生活を送りますが、野山獄に収監された14か月の間だけでも618冊もの書を読破したといえますし、西郷隆盛も沖永良部島に島流しになったときには約800冊の書籍を持っていき、ひたすら書を読んで心魂を練ったそうです。こうした読書のチカラが日本の新たな夜明けを導いたのでしょ。 (川辺)



## 【「見えない学力」を育てましょう！】



数学者の広中平祐に「冰山」についてのエッセイがあります。海面に見えている部分は冰山全体からすればほんの僅かで、眼に見えない海面下の部分が約90%を占めている、というものです。このあと、人間の脳も80%しか使われていないがと続いていくのですが、その海面下の部分が、今、注目を集めています。

第26号でご紹介した『世界のエリートはなぜ「美意識」を鍛えるのか?』(山口周)という本の中に『偏差値は高くても美意識は低い』という人に共通しているのが、『文学を読んでいない』という点である」といった指摘がありましたが、偏差値やテストは数字で表せますから「見える学力」ということになります。好奇心、責任感、集中力、粘り強さなどは、数字では測れないので「見えない学力」です。

21世紀は、冰山で言えば海面下に相当する、この「見えない学力」を育てることに教育の方向性がギアチェンジされつつあります。偏差値エリートに象徴される知性や理性、論理力の高さだけでは、現在、地球が抱えているグローバルな問題を解決するのが難しくなってきたからです。

岡潔は、世界中の数学者が頭を抱えていた「三大問題」を続けざまに解決に導き、数学界のノーベル賞とも言われるフィールズ賞を受賞した数学者ですが、この人の全集(全5巻)を読んでいると、本業の数学に関してはほとんど言及せず、文学、哲学、宗教、自然などに多くのページを割いています。なかでも、何度も出てくるのが「情緒」という言葉です。日本人の根底にあるのは「情緒」で、そこに日本人独特の美意識の源流があると考えています。

美とは直感の申し子です。スティーブ・ジョブズは、「何より大事なものは、自分の心と直感に従う勇気を持つこと」だと語っています。小林秀雄も、上野の展覧会でゴッホの『カラスのいる麦畑』の複製画を見た瞬間、「一つの大きな眼に見据えられ」「しゃがみこんでしまうほどの感動に襲われ、モーツァルトのレコードを聴いた際には「突然、感動が」来て、「観念上の限界が突破された」という体験を『ゴッホの手紙』の中で熱く語っています。

偏差値エリートは階層システムに安住しがちですが、幕末の混沌とした時代に似ていると言われる21世紀は、シームレスで多様性に富んだ世界を「悠々と往来できる」器量と「見えない学力」を備えた人材が必要不可欠です。そのためにも読書を通して感性や美意識を高めていく指導を心がけてまいりましょう。(川辺)

